

に云ふ今世にも小兒の所翫俗に裝束ひなと申候人形の劍皆柄首鳥頸に候云々、  
 奈良の在所帶解といふ處に、土燒の雛あり略註この土雛古きも有べけれど、子喜多が見しは、  
 男雛太刀を帶、女雛天冠をきて、共に臺あり、高さ六寸五分許ありき、古風にはあらず、

〔雍州府志七〕繪草子 倭俗以紙作小偶人夫婦之形、是謂雛壹對、其外大人小兒之形各造之、女子  
 並置座上、供酒食、爲人間而玩之、是謂雛遊、又稱雛事、女子平生雖玩雛、三月三日專爲此戲、凡雛諸鳥  
 之子也、誤稱之者乎、

〔圖會〕年中行事大成二下三日 上巳又桃の節供今日を俗に節供と稱す略中今日良賤の兒女子、

雛祭として雛人形を祭る雛は小き是少彦名命を祭なりとぞ、往古は紙偶人を用し其形、烏帽子を著  
大なる形を男雛といふ、下髪に袖なしに卷たる小なる形を女雛と號し、是を紙雛と云、大なるは  
大己貴命、小きかたは少彦名命なりと云々、或云、今男雛といふは神功皇后にして、小なるは應神  
天皇いまだ襁褓の内に住たまふ體近年は綾羅綿繡をもつて制したるを衣裳雛となづく、又御  
 殿隨身橘櫻の造り花を莊り、小き調度をならべて饗應す、是兒女は幸福有んことを祝するなり

〔見た京物語〕雛はよろしきあり、多く御殿作り、隨身衛士などあり、

〔ひな人形の故實〕享保の頃は、宿禰ひなとて、土の比々、奈用丹青にて色飾、殿は男山八幡の土を以  
 て作り、姫は加茂の土を用ゆ、女は高きもいやしきもよめ入して、夫に隨ひ、男は外を納め、女は  
 内を納るなれば、家業筋もひな祭になぞらへ、其ま、手馴ならひ引を本意とす、め、家内むつま  
 しく質素をむねとなし、粟嶋大明神いたつて小き御すがた故御ひなのすがたと云を、ひな人形  
 神歟、唐土にも上巳饒人祭も有とか略中ひなは、ちいさき義なれば、女子ひなさま事とて、ま  
 ごとなどして、紙びな作、色紙などべ、きせ、婢女奴等つくり、平紙にのりて付、人家むつましき體  
 をいたし、翫び、小米ひなといふ略下